

令和7年度 東生野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様に説明責任を果たすことが重要であると考え、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、学校が各調査の結果や各調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、各調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにし、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 「全国学力・学習状況調査」の調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2-1 「中学生チャレンジテスト」の調査の目的

- (1) 大阪府教育委員会が、府内における生徒の学力を把握・分析することにより、大阪の生徒課題の改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図る。加えて、調査結果を活用し、大阪府公立高等学校入学者選抜における評定の公平性の担保に資する資料を作成し、市町村教育委員会及び学校に提供する。
- (2) 市町村教育委員会や学校が、府内全体の状況との関係において、生徒の課題改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、学力向上のためのPDCAサイクルを確立する。
- (3) 学校が、生徒の学力を把握し、生徒への教育指導の改善を図る。
- (4) 生徒一人ひとりが、自らの学習到達状況を正しく理解することにより、自らの学力に目標を持ち、また、その向上への意欲を高める。

2-2 「大阪市版チャレンジテストplus」の調査の目的

- (1) 生徒及び保護者が、学習理解度及び学習状況等を知り、目標をもって主体的に学習に取り組めるようにする。
- (2) 学校が生徒一人ひとりの学力を的確に把握し、学習指導の改善及び進路指導に活用する。
- (3) 学びの連続性を確立する観点から、客観的・経年的なデータを把握、分析し、効果的な指導方法や課題を「見える化」し、その改善に役立てる。

3 「大阪市英語力調査（GTEC）」の調査の目的

- (1) グローバル社会において活躍し貢献できる人材の育成をめざし、生徒の英語力の充実・向上を図るため、本市教育振興基本計画に基づき、生徒に求められる英語力や学習の習熟過程等を把握・検証する。
- (2) 生徒が自らの英語力を的確に把握するとともに、生徒の英語力の実態を分析することにより、各学校における学習指導の充実や改善、工夫に役立てる。

4 「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の調査の目的

- (1) 子供の体力・運動能力等の状況に鑑み、国が全国的な子供の体力・運動能力の状況を把握・分析することにより、子供の体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 各教育委員会、各国公立学校が全国的な状況との関係において自らの子供の体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、子供の体力・運動能力の向上に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 各国公立学校が各児童生徒の体力・運動能力や運動習慣、生活習慣、食習慣等を把握し、学校における体育・健康等に関する指導などの改善に役立てる。

令和7年度 東生野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

1 全国学力・学習状況調査

※中学校理科はICT端末等を用いた、文部科学省CBTシステム（MEXCBT）によるオンライン方式（以下、「CBT」【=Computer Based Testing】とする）で実施。

学年 実施月日		生徒数 (人)	平均正答率(%)		平均無解答率(%)		平均IRTスコア	
			国語	数学	国語	数学	理科	
3年	学校	60	49	40	9.1	12.8	448	
	大阪市	—	52	46	6.8	11.2	489	
4月17日	全国	—	54.3	48.3	6.7	10.6	503	

※IRTとは、国際的な学力調査等で採用されているテスト理論です。

この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし（尺度）で比較することができます。

※IRTスコアとはIRTに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すものです。

2 中学生チャレンジテスト

学年 実施月日		生徒数 (人)	平均点(点)					平均無解答率(%)				
			国語	社会※	数学	理科※	英語	国語	社会※	数学	理科※	英語
3年	学校	64	58.9	47.6	48.7	45.1	46.9	7.9	6.0	12.7	10.4	7.3
	大阪市	—	64.8	51.5	54.3	46.5	54.4	6.1	5.8	11.1	9.4	6.5
9月2日	大阪府	—	64.2	51.2	53.9	46.0	53.2	6.8	6.5	12.1	11.0	7.4
2年	学校	84	57.4	40.6	47.0	38.9	44.2	9.1	6.7	12.0	6.2	9.3
	大阪市	—	65.2	45.0	56.0	47.9	52.4	6.6	5.6	10.3	4.2	6.9
1月14日	大阪府	—	64.5	44.3	55.0	46.7	51.8	7.3	6.3	11.7	5.0	7.6
1年	学校	96	54.5	57.7	51.4	59.1	64.2	12.9	4.2	8.9	5.9	4.5
	大阪市	—	63.3	58.3	57.6	63.0	66.5	9.1	3.0	7.6	3.6	4.1
1月14日	大阪府	—	63.1	—	56.7	—	65.2	10.2	—	8.8	—	4.9

※ 1年生の社会・理科については、「大阪市版チャレンジテストplus」として実施

※ 1年生の理科は化学的領域を選択

※ 2年生の社会はA問題を選択

※ 3年生の理科はB問題を選択

3 大阪市英語力調査 (GTEC)

学年 実施月日		生徒数 (人)	読むこと	聞くこと	書くこと	話すこと
			【リーディング】	【リスニング】	【ライティング】	【スピーキング】
			(スコア)	(スコア)	(スコア)	(スコア)
3年	学校	66	105.1	100.0	134.4	95.6
10月17日	大阪市	—	117.4	110.2	146.4	98.4

4 全国体力・運動能力、運動習慣等調査

学年	生徒数 (人)	握力	上体 起こし	長座 体前屈	反復 横とび	20m シャトル ラン	持久走 男子1500m 女子1000m	50m走	立ち 幅とび	ハンドボール 投げ	体力 合計点	
		(kg)	(数)	(cm)	(点)	(回)	(秒)	(秒)	(cm)	(m)	(点)	
2年 男子	学校	77	35.28	29.40	52.36	49.35		7.80	208.43	23.93		
	大阪市	—	28.65	26.89	43.47	51.80	80.14	425.49	8.06	195.02	20.28	41.69
	全国	—	28.95	26.09	45.12	51.64	78.82	409.25	8.00	197.51	20.74	42.20
2年 女子	学校	—	24.24	25.07	42.43	45.23		8.51	174.94	12.45		
	大阪市	—	23.12	22.70	46.32	46.59	53.12	318.64	9.03	166.76	12.20	48.14
	全国	—	23.15	21.70	46.99	45.74	50.60	309.66	8.97	166.44	12.43	47.58

令和7年度 東生野中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

令和7年度 全国学力学習状況調査結果より

国語

【成果と課題】

大阪府の平均点まであと3点に迫ることができた。基礎知識や語彙力に関してはおおむね定着が見られた。読むことに関する正解率が高かった。文章全体の構成を捉え、筆者の意図を踏まえて自分の考えを表現する問題に課題があった。また、基本的な語句や読み取り問題においても解けない生徒の割合が多かった。

【今後に向けて】

読書量や言語体験の差が、理解力や表現力の差につながっていると考えられる。今年度から、「読書」の取り組みを行い読解力向上に努めている。「何を書いたらいいかわからない」と最初から諦めて手をつけない生徒もいるので、完璧な解答でなくても良いこと「一文だけでもよいかから書くこと」の練習を積みませている。

数学

【成果と課題】

平均正答率は40%であり、全国と比べて-8.3ポイントであった。前年度と比べて全国との差は3.2ポイント縮まったが、まだまだ多くの課題が残る結果となっている。特に学習指導要領の領域のうちでは「関数」や「図形」が大きく下回っており、「思考・判断・表現」の観点別正答率が低いことから、知識・技能にとどまらず、それらを活用して論理的に考え、表現する力に課題があると考えられる。この現状を踏まえ、今後の授業改善においては生徒が自ら問いを立て、多様な方法で探求し、得られた知見を他者と共有する『主体的・対話的で深い学び』を推進していく必要がある。

【今後に向けて】

数学科においては上記の成果と課題を踏まえ、今後以下のような取り組みを実施する。

(1) 授業改善

・問題解決型学習の導入: 単元ごとの終末に、関数や図形の知識を応用して現実世界の問題を解決する課題を設定する。生徒が興味を持って取り組める題材を積極的に取り入れる。
・協働学習の促進: グループワークやペアワークを増やし、生徒同士が互いの考えを説明し合い、疑問点を解決する機会を設ける。これにより、自分の思考を言語化する力と、他者の考えを理解する力を養う。

(2) 評価方法の改善

・多面的な評価の導入: 定期テストだけでなく、授業内での発表、レポート、グループ活動への貢献度など、多様な側面から生徒の学習状況を評価する。これにより、単なる知識の有無だけでなく、思考力や表現力といった汎用的な能力も公正に評価する。これらの取り組みを通じて、数学の面白さや実用性を実感させながら、生徒一人ひとりの「思考・判断・表現」の力を確実に伸ばしていくことを目指す。

理科

【成果と課題】

今年度の結果としては、「大阪府標準偏差127.8ポイント・本校108.5ポイント」という結果であり、大阪府の標準偏差から19.3ポイント下回った結果となった。昨年度、2年次に受験したチャレンジテストの平均点では、大阪府平均から+2.5点であった。今年度の大阪府の標準偏差から19.3ポイント下回ったことをふまえると、1.2年次に学習した内容からの出題のため、範囲が広く、復習不足であると考えられる。今回の設問からでは、学習領域ごとの分析は難しかった。問題形式では、選択式は、無解答率が0%に対し、記述式では、無解答率が31.9% (大阪府13.4%) であり、思考判断表現の観点が悪手な生徒が多いことが分かった。選択式でも、思考判断表現の観点も問題では、正答率が30%以下であった。

【今後に向けて】

全体として、思考判断表現の観点の得点率が著しく低いことがいえる。これを改善するためには、「問題を読み解く力」と「考えを表現する力」を養っていく必要がある。授業の中でも、答えを導くことや文を読み解くことを苦手とする生徒も少なくない。暗記するのではなく、実験や観察を通して解答を導くための方法を指導していく。

令和7年度 東生野中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

令和7年度 3年生チャレンジテスト

【成果と課題】

(国語)

大阪府の平均まであと約5点であった。平均点には追い付かなかったが100点から70点以上が3割と健闘した。学習内容を深く理解し、読解・表現の力が身に付いている上位層が育っている結果と考える。しかし、得点の二極化が大きく、思考力を問う問題の平均が特に低かった。

(社会)

平均正答率は、大阪府平均の51.2に対して、本校平均は、47.6ポイントで-3.6ポイントであった。特に複数の資料から、情報を読み取り、選択式で答える問いに対して、-10ポイント以上(最大-20ポイント)大阪府平均を下回った。一方で、沖縄県に関する問題は、修学旅行で沖縄に行き、平和学習をしたこともあり、興味関心が高く、記憶していることも多く正答率は高かった。また地形図に関する問題は、事前に過去のチャレンジテストに出ている類似する地形図の問題を行っていたため、正答率が大阪府平均を上回った。ただ全体的には、やはり、忘却による誤答が多いように思われる。一部で、印象に残る人物に関しての事柄に関しては、記憶している生徒がいることも正答率の比較でうかがえる。

(数学)

府平均と比べて平均正答率は-5.2ポイントであった。設問別集計結果を見ると、基礎・基本問題については大阪府の正答率と比べても大きく差はなく、問題によっては超えるものもあった。しかし、読解力が必要となる応用的な問題になると大阪府の正答率と比べて大きく下回っている。特に証明や説明の問題になるとより大きな差となってしまっている。

(理科)

今年度の結果としては、「大阪府平均46.0点、本校45.1点」という結果であり、大阪府の平均点から0.9点下回った結果となった。昨年度、2年次に受験したチャレンジテストの平均点では、大阪市より+2.5点であった。今年度の大阪府平均から-0.9点であったことをふまえると、範囲が広くなり、復習もしたが、課題が残る結果になった。今回の設問では、「粒子領域」「地球領域」で大阪府平均を上回る得点率であった。

「粒子領域」では、1,2年次で行った化学実験の復習をした。実験内容のを中心に行なったため、『再結晶』などの用語は92%の正答率であった。しかし、質量パーセント濃度の計算や溶解度の計算は1年次から苦手な生徒が多く、溶解度の計算問題の正答率は0%であった。溶解度は簡単な計算で出せる問題だが、『計算をする』というだけで避けてしまう生徒が多いと読み取れる。また、「地球領域」では、実力テストで点数が低かった火山の問題がでたため、実力テスト後に復習を取り入れていた。そのため、無解答率も少なく、短答式や記述式にも50%近くの生徒が正答していた。「エネルギー・生命領域」は大阪府の平均とあまり差がなかった。その中でも、正答率が低かったのはエネルギー領域の計算問題であった。

(英語)

府平均と比べて平均正答率は46.9点で府平均-6.3ポイントであったが、昨年度の2年生(-7.5ポイント)を上回った。

3年生では、1学期に数回単語テストを行い、語彙力の定着に力を入れた。また毎回の授業でペアワークを行いながら、単語や短い英文を聞いたり読んだりし、また昨年に引き続き、初見の英文を決まった時間で読んで問題を解くことも繰り返し行った。(“読むこと”と“聞くこと”)その成果もあってか、4技能(聞く、読む、話す、書く)のうち、“読むこと”と“聞くこと”は府平均に近い成績を出すことができた。(聞くこと -1.8ポイント、読むこと-1.5ポイント)しかしながら“書くこと”は、府平均-3.0ポイントとなり、課題が残った。

【今後に向けて】

(国語)

基礎問題での取りこぼしが多い層へのアプローチが必要である。“読めていない”

“文が拾えていない”などの傾向が見られる。今年度から朝学習に「読書」を取り入れているが、国語が苦手な生徒の多くは、ただ文字を追っているだけで読解力の育成には至っていない。具体的な取り組みとして①語句の意味②文中の根拠の拾い方③記述の基本形(主語+述語+理由)などを問うミニ課題を導入し成功体験を積みませたい。小さな達成を積み重ねることで、肯定的な自己認識が育つのではないかと。「次も取り組んでみよう」という意欲が、学習習慣の確立にも繋がると期待している。

(社会)

社会科において、文章や資料の読み取りを行う授業ができておらず、講義や映像により資料提示が中心になっている。こちらから教授するだけでなく、文章を読み、自ら文章にまとめる、積極的な学びを展開する必要がある。ただ教示する事柄が多いので、授業中だけでは、そのような情報の読み取りに終始する時間がないので、やはり家庭学習で、生徒自身が積極的に学習する時間を確保し、自発的に学習しなければならない。そのような習慣と態度を養えるようにも、指導しなくてはいけないと感じる。単純に文章読解力が低いという実態があるので(その反面、コミュニケーション能力(表現力)や運動能力は高い)、幼少期の頃から、文章を読むという落ち着いた環境を作るのも必要不可欠で学校教育だけでは、不可能である。(生徒の話聞く姿勢態度は、大阪府の中でも上位に入ると思われる)

(数学)

今回のチャレンジテストでは、証明問題や説明問題の正答率が低く、論理的に道筋を立てて考えをまとめる力が十分に育ってないことが明らかになった。今後は、授業の中で「なぜそうなるのか」を言葉で表現する活動を増やし、根拠を明確にして説明する習慣を身に付けさせたいと考えている。また、基本的な定義や性質の理解を確実にし、それらを活用して論理を組み立てる練習を段階的に進めることで、証明・説明問題への対応力を高めていく。

(理科)

全体として、計算問題の得点率が著しく低いことがいえる。これを改善するためには、「問題を読み解く力」と「どの計算方法で導けるかを考える力」を養っていく必要がある。授業の中でも、答えを導くことや文を読み解くことを苦手とする生徒も少なくない。計算問題は特に暗記するだけでは解けない。そのため、どの分野でどの公式を使用するか、問題文をどのように読み解くかを、プリントや問題集を宿題で出すだけでなく、授業内で解説する時間を確保し、指導していく。

(英語)

“読むこと”、“聞くこと”については、継続して音読指導とリスニングの練習などに力を入れる。また、“読むこと”については、多くの初見の英文に触れさせ、短時間で読めるように繰り返し練習する。また来年度も語彙力を高めるために単語テストを行い、定着させる必要がある。“書くこと”についても、今後は学習した語句の復習を帯活動で行う、多くの語句を使って英語を書かせるなどして改善を図る。さらにまとまった文を書く練習を各単元後に行うことで定着させる。

また、“読むこと”と“書くこと”や、“聞くこと”と“書くこと”などを統合的かつ複合的に行う活動を積極的にを行い、生徒の書く力を向上させる。次年度は、府平均を超えることをめざす。

令和7年度 東生野中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

令和7年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査

【成果と課題】

全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果において男子は7種目中(長距離を除く)、6種目、女子は7種目中(長距離を除く)、5種目で全国平均、大阪市平均を超えることができた。授業において「めあて」、「ふりかえり」を徹底することで、生徒一人一人が課題を意識して授業に取り組むことができていたのではないかと考える。

男子は反復横跳び、女子は反復横跳び、長座体前屈が全国平均、大阪市平均を超えることができなかった。柔軟性や敏捷性の向上を目標に、体力づくり運動や授業の準備運動で継続した活動を行ったが、授業の取り組みだけでは運動量や継続性においても効果がある活動までとはいかなかった。授業における工夫や授業以外の取り組みも必要であると考えます。

【今後に向けて】

授業規律を確保しつつ、生徒の学力向上に向けた授業改善に向けた取組として、授業における「めあて」、「ふりかえり」を徹底することで生徒一人一人が課題を持って授業に参加することに重点を置きたい。

体力向上については、授業の中で敏捷性の向上について、効果が表れていないので来年度も引き続き取り組んでいきたい。授業での工夫とともに学校全体の活動に位置付けていきたい。

体力向上を目指し、生活習慣の確立、食育推進との取り組みとも関連づけていきたい。

令和7年度 GTEC英語能力テスト

【成果と課題】

リーディング(105ポイント)、リスニング(100ポイント)、ライティング(134ポイント)、スピーキング(95ポイント)で、リーディングとリスニングは本校の昨年度の結果を超えることができた。リーディングについては、普段から文をかたまりごとに読む練習の効果が出たのではないかと考える。またリスニングも同様に普段から英文を聞かせて、状況をイメージさせることをしていた。しかし、ライティングについては、英検3級取得に向けて取り組みを行ったが、活動が不十分であったと考えられる。

【今後に向けて】

リーディング、リスニングについては、普段からの音読の練習、文をかたまりごとに読んだり、イラスト等を見て、英語を聞き取らせる活動などを維持する。またライティングについては、継続的に書かせることを意識し、練習量を確保する。

令和7年度 東生野中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

令和7年度 2年生チャレンジテスト

〈国語〉

【成果と課題】

府平均と比べて平均正答率は7.1ポイント下回った。昨年度と比べるとわずかながら改善されているが、分野を問わず、全体的に力は足りていない。中でも漢字の書きについては無解答率が20%を超えており、1年生のころから習慣化している漢字の書き取りが、依然効果を発揮していないと分かった。テストの直前に学習した手紙の基礎知識も正答率を5ポイント以上下回っており、学習した内容を定着させるのにはこれまで以上に時間をかける必要がある。同時に学習に臨む意識を高めることが喫緊の課題だと痛感している。

生徒向けアンケートの「文章や資料を読むときに、どこが大事なところか考えながら読んでいる。」の質問において、本校2年生の肯定的回答は大阪府を上回っていたが、実際はどこが重要なかを十分に捉えられておらず、それがスピーチやポスターに関する問題の正答率に表れていた。しかし昨年度からの比較ではわずかながら改善されている。言語情報を客観的にとらえ、理解し、それを表現する力を今後も改善できるよう努めたい。

【今後に向けて】

国語科においては、引き続き漢字の書き取りを続け、基礎知識の向上を図りたい。さらに、複数の資料を読み関連付ける学習やスピーチの取り組みを積極的に取り入れ、言語情報を正確にとらえ、作者の意図を読み取る能力を高めていきたい。

〈社会〉

【成果と課題】

府平均と比べて平均正答率は マイナス3.7ポイントであった。設問ごとに見ていくと、府平均より大幅に正答率が低かった問題として、記述で解答するものが複数あった。思考力・表現力をつけるために、毎回の授業で「発展問題」として課題を出し、理由を述べたり物事について説明する練習をさせている。3年前の学年では、記述式の問題はおおむね府平均と変わらない正答率であったが、現2年生は平均を大きく下回る問題が多かった。現2年生の「発展問題」への取り組み方を見ていると、すぐにタブレットを使い、課題の問題文を入力して、AIの出した解答を丸写ししているのが現状で、これが思考力・表現力の低下の原因であると考えられる。

【今後に向けて】

社会科においては、今後、思考力・表現力を磨くための方策を考え、取り組んでいく必要がある。現在取り組んでいる「発展問題」は、毎授業の宿題として課しているが、もっと授業時間の中で考えさせ、AIを使わず自分の言葉で表現する訓練を取り入れていきたい。「チャレンジテストの範囲をこなす」という足かせがある中、どこまで時間を作れるか。授業内容の精選を図っていきたい。

〈数学〉

【成果と課題】

大阪府全体の平均と比較して-8.0ポイントであった。学習指導要領の領域別平均点を見ると「数と式」で大阪府と比較して-3.1ポイント、「関数」で-2.7ポイント「図形」で-2.1ポイントであった。本校の生徒は各領域で大阪府平均より低い結果であったが図形の領域のみ大阪府平均を上回る問題が多かった。この領域は2学期後半に学習したものである。このことから直前に学習した範囲の問題は正答率が高く、少し前に学習した範囲の問題では正答率が低い。正答率が低かった問題は特に一次関数の範囲であった。この原因として第1学年比例・反比例の理解が不十分であると考えられる。第1学年で学習する関数の概念が理解できていないため一次関数の学習が身についていないと考えられる。得点分布のグラフをみると0点～10点の割合が4.8%(4人)11点～19点の割合が17.8%(15人)、20点から39点の割合が20.4%(17人)であり、約40%以上が40点未満であることがわかる。

【今後に向けて】

・関数の理解が不十分であるため、比例・反比例から復習を行う。・20点未満の生徒が22.6%(19人)であるので、ここに分布する生徒には基本的な計算を徹底して指導し、基礎を定着させ、大門1,2の正答率70%を達成できるようにする。・20点以上40点未満の生徒20.4%(17人)に対しては授業内での演習量を増やし、基本的な問題を早く正確に正答できるようにする。・第三学年での学習を円滑に進めるために第一、第二学年で学習した内容の振り返りを今学期に行い、基礎問題の定着を図る。

〈理科〉

【成果と課題】

府平均と比べて平均正答率は、「生命」分野で府平均(49.1%)との開きが最も小さい得点率(40.5%)であった。特にこの分野では基本的な知識問題は正答率が良かった。「粒子」分野の得点率(38.3%)で、質量保存の法則は定着しているが、計算問題で苦戦していた。「地球」分野の得点率(37.0%)で、天気図の記号は正答率が良かったが、図解の読み解く問題で大幅に正答率が下がった。

【今後に向けて】

記述式問題への苦手意識があり、府平均(34.3%)の約半分の17.3%だったので、「実験のきまり」の定石をパターンとして覚えるなどさせたい。また引き続き、定期テストで記述式問題を増やしていく。また、全体的に「知識・技術」の得点率(41.2%)に比べ、「思考・判断・表現」は(35.7%)で、知識はあるが実験結果やグラフに当てはめるのが苦手であるため、授業や定期テストに取り入れていきたい。

〈英語〉

【成果と課題】

府平均と比べて平均正答率は7.6ポイント下回った。領域別では「聞くこと」-1.7、「読むこと」-1.6、「書くこと」-4.2となっている。「読むこと」に関しては正答率が昨年よりも府平均に近づき、正答率が府平均より上回る問題もあった。「書くこと」及び「記述式」で答える問題で、正答率が府平均より特に低く、また無回答率が高くなっている。

【今後に向けて】

英語科においては、単語、文法問題、英作文問題で正確に「書くこと」を積み重ね、より丁寧に個別指導をしていく。少ない問題数の単語テストを繰り返す行うなど、生徒に取り組みやすい課題を積み重ねる。「読むこと」と「書くこと」、また「聞くこと」と「書くこと」を統合した活動に取り組み、テストでの無回答をなくせるように指導していく。

令和7年度 東生野中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

令和7年度 1年生チャレンジテスト

〈国語〉

【成果と課題】

府平均と比べて平均正答率は10ポイント近く下回った。選択式の問題の正答率も課題である。ただ、それ以上に記述式の問題に関して苦手意識があり無回答率が不平均よりも高い数値である。

【今後に向けて】

国語科においては、①週1回の漢字小テストに加え課題を出す。②週1時間(漢字テストとは別日程)授業初めの5分間を使い読書の時間を設ける。③週1回新聞コラム課題(自主学習)、月1回新聞コラム課題(全員)、に取り組む。

〈数学〉

【成果と課題】

府平均と比べて平均正答率は、5.3ポイント低かった。図形領域は府平均を上回り、強みにみられる。一方で、「数と式」「関数」においては府平均をやや下回っており、特に計算の確実性や活用問題への対応力に課題がある。今後は基礎基本の定着を徹底するとともに、思考力を問う問題への取り組みを強化し、全体の底上げを図る必要がある。

【今後に向けて】

「数と式」「関数」における基礎学力の定着を重点課題とし、計算力や基本事項の反復徹底、誤答分析に基づく補充指導を実施する。特に、計算力の向上は、関数や図形を含む他領域の理解や問題解決の土台となることから、全領域の得点力向上につながる基盤として重点的に取り組む。一方、府平均を上回った図形領域については、生徒に共有し、強みを維持・伸長するとともに、他領域への展開を目指す。

〈英語〉

【成果と課題】

府平均と比べて平均正答率は1点低かった。「聞くこと」においては府平均より0.6点高く、授業で英語を聞かせることを意識した成果が見られた。「読むこと」は0.3点、「書くこと」においては1.3点府平均より低かった。

【今後に向けて】

英語科においては、英語を聞かせることは継続した上で、今後は英文を書く活動を増やしていこうと思う。

令和7年度 1年生チャレンジプラス

〈社会〉

【成果と課題】

社会科の大阪市平均(58.3)と比べて校内平均正答率(57.7)は-0.6ポイントであった。地理的分野では、市平均正答率(58.3)に対して校内平均正答率(55.4)が低かったが、歴史的分野では、市平均正答率(58.3)を校内平均正答率(60.1)が上回った。これは、地理のほうで資料を読み取る問題が多く、複数の事項を比べながら考えるということを苦手としている本校の特徴であると思われる。特に数字がその事項の中に加わると計算力も含めて、特に正解することが難しくなる。また外国籍でまだ渡日、間もない生徒も日本語を読解することができないため、社会科の問題を解くことができない。一問一答のような出題には、比較的答えることができているのは、普段の学習の成果はある程度表れているといえる。

【今後に向けて】

社会科においては、日々の授業と家庭で基本基礎的な知識の定着を図ることをしていかななくてはならない。毎回の確認テストを行っているが、間違った語句は家庭で繰り返し書くことで覚えなおさなくてはならない。基本基礎的な知識を定着した上で、資料や文章を読みとり、社会的事象を整理し、表現できるように総合的読解力を養う必要があると思われる。どのようにして総合的読解力を養うかを考える必要があるが、一つの例として、授業で、まずは個別で長い文章や資料を読み取り、その後グループワークを行う。個別で考えるのではなく、お互いで意見を出し合うことで、他者の意見を聞きながら、情報を整理し、自らもそれをアウトプットしていく技術を養えるようにしたいといけな

〈理科〉

【成果と課題】

基礎的な知識やグラフの「活用」カテゴリーにおいて、市平均(64.8%)に対し校内(63.3%)と近く、知識を応用する力の土台はできてきた。しかし、「粒子」分野が市平均を10ポイント近く下回る項目があった。また実験結果から法則性を導き出す考察力や計算問題に課題があった。

【今後に向けて】

目に見えない現象を引き続き動画を積極的に活用する。また生徒用タブレットを用いてシミュレーション教材を使用するなど、イメージを具体化させたい。また実験結果を書くだけでなく、「なぜこの結果になったのか」「もし条件を変えたらどうなるか」をペアワーク等で議論する時間を授業で作り、思考力・考察力を伸ばしていきたい。

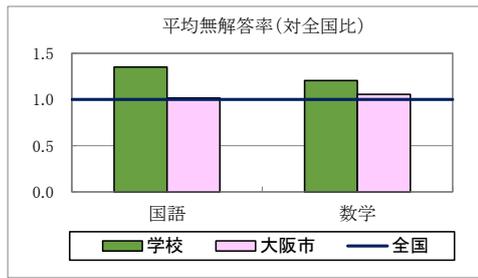
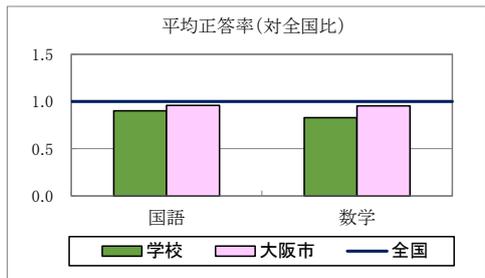
令和7年度 東生野中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

全国学力・学習状況調査 教科に関する調査より

【 全 体 】

	平均正答率(%)	
	国語	数学
学校	49	40
大阪市	52	46
全国	54.3	48.3

平均無解答率(%)	
国語	数学
9.1	12.8
6.8	11.2
6.7	10.6

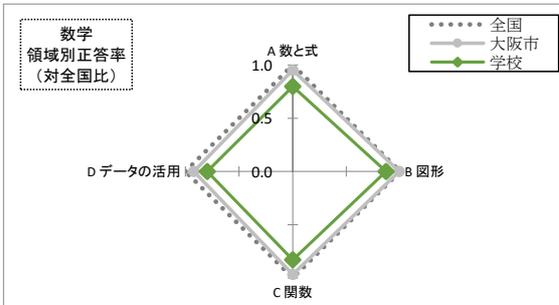
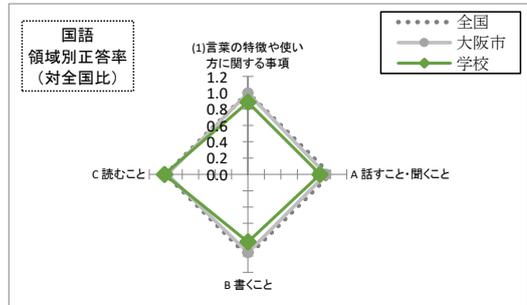
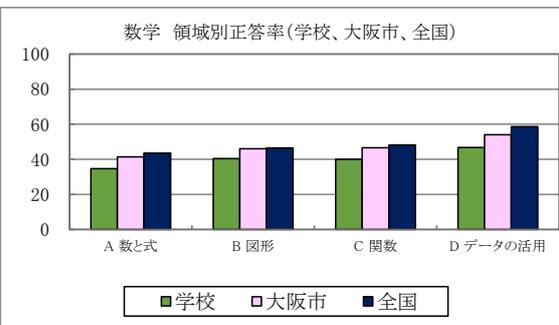
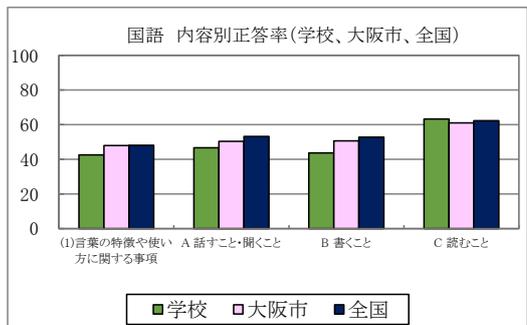


【 国 語 】

学習指導要領の内容	対象設問数(問)	平均正答率(%)		
		学校	大阪市	全国
(1)言葉の特徴や使い方に 関する事項	2	42.5	47.9	48.1
(2)情報の扱い方に 関する事項	0			
(3)我が国の言語文化に 関する事項	0			
A 話すこと・聞くこと	4	46.7	50.4	53.2
B 書くこと	5	43.7	50.6	52.8
C 読むこと	3	63.3	61.0	62.3

【 数 学 】

学習指導要領の領域	対象設問数(問)	平均正答率(%)		
		学校	大阪市	全国
A 数と式	5	34.7	41.4	43.5
B 図形	4	40.4	46.1	46.5
C 関数	3	40.0	46.6	48.2
D データの活用	3	46.7	54.0	58.6

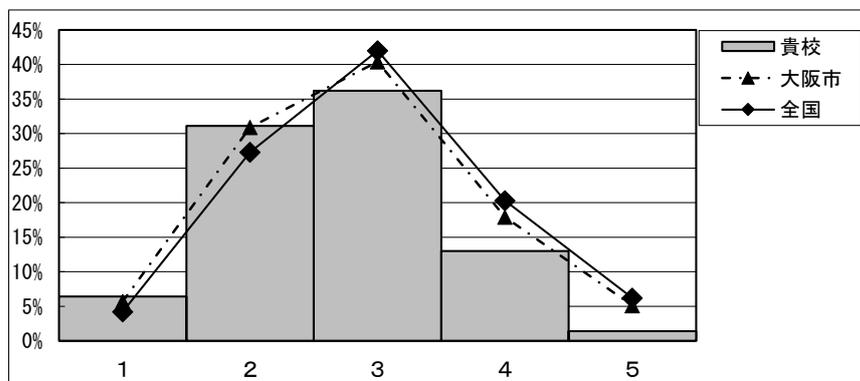
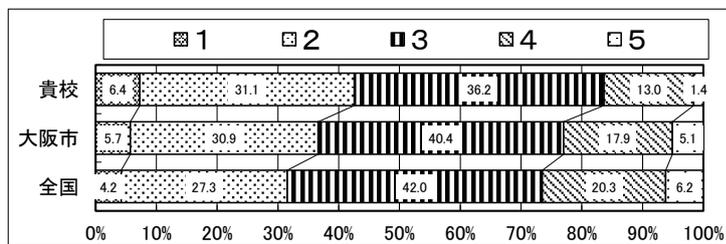


令和7年度 東生野中学校のあゆみ
 —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

全国学力・学習状況調査 教科に関する調査より

【理 科】

	平均IRTスコア
学校	448
大阪市	489
全国	503



令和7年度 東生野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

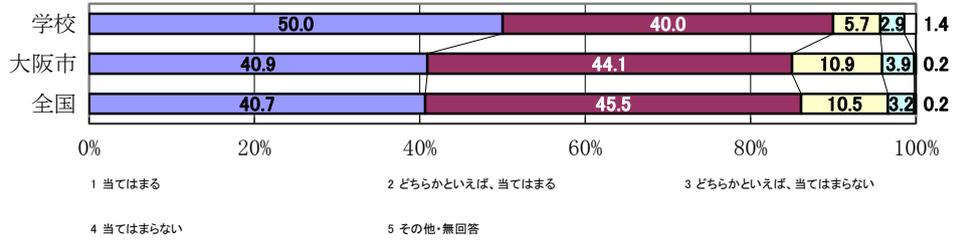
生徒質問より

1 2 3 4 5 6 7 8

質問番号
質問事項

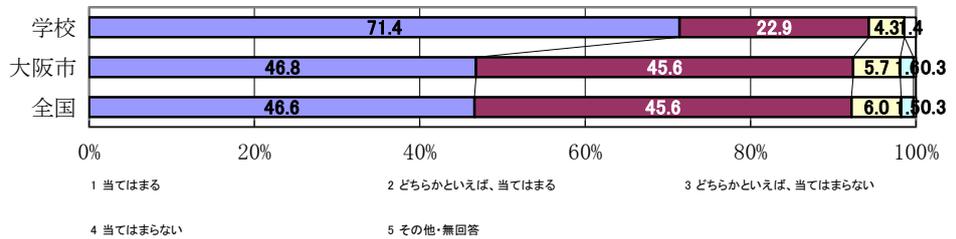
5

自分には、よいところがあると思いますか



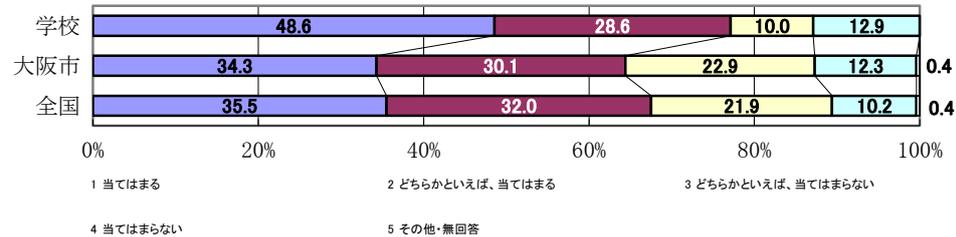
6

先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか



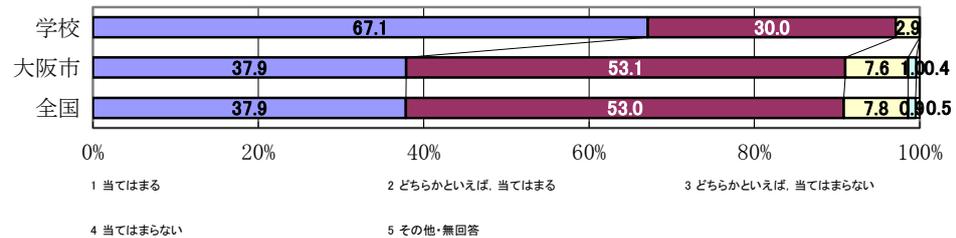
7

将来の夢や目標を持っていますか



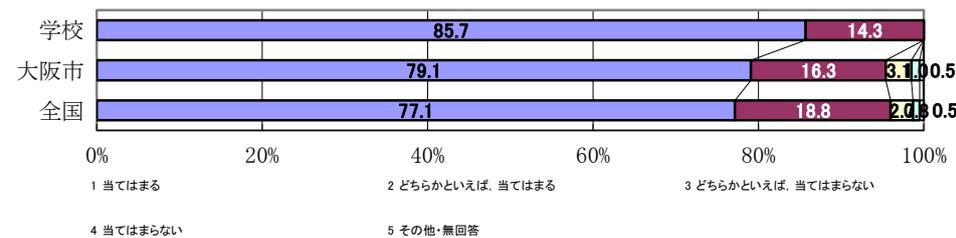
8

人が困っているときは、進んで助けられていますか



9

いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか



令和7年度 東生野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

学校質問より

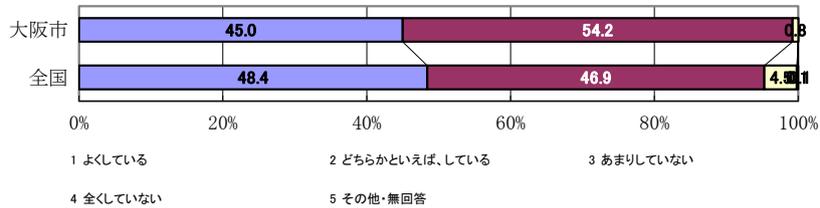
□1 □2 □3 □4 □5 □6 □7 □8 □9 □10

質問番号
質問事項

18

授業研究や事例研究等、実践的な研修を行っていますか

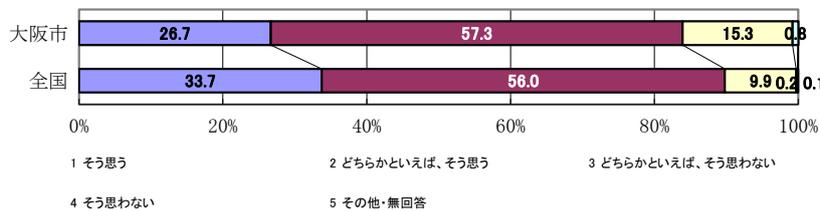
学校 「よくしている」を選択



22

今までの取組をそのまま踏襲するのではなく、新しい取組を導入したり、提案をしたりしてくる教職員が多いと思いますか

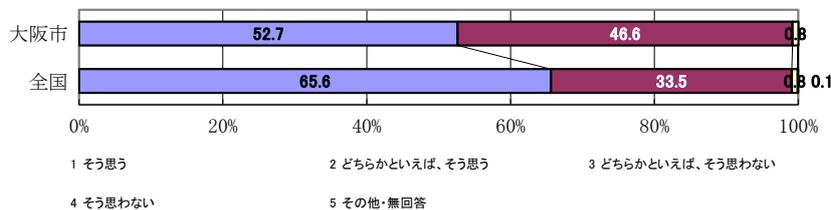
学校 「そう思う」を選択



23

教職員が困っているとき、管理職と教職員との間で随時相談できるなど組織的に対応する体制を構築していると思いますか

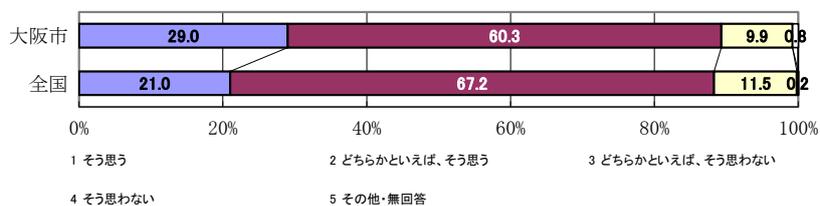
学校 「そう思う」を選択



25

調査対象学年の生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか

学校 「そう思う」を選択



57

コンピュータなどのICT機器の活用に関して、学校内外において十分に必要なサポートが受けられていますか

学校 「どちらかといえば、そう思う」を選択

